

第3回「日本ラテンアメリカ学会優秀論文賞」受賞論文講評

Eiji YASUHARA, ¿"Un pequeño dios" o "un maquinista atrasado"? la trayectoria a *Altazor* de Vicente Huidobro, 『ラテンアメリカ研究年報』42: 287-319, 2022年

本論文は、チリの詩人ビセンテ・ウイドブロが1931年に発表した長編詩『アルタソール』(*Altazor*)を、それ以前の作品群との関係に着目して論じた研究である。『アルタソール』を理解するためには、1920年代に出された詩論『マニフェスト』(*Manifestes*, 1925)と詩集『突然』(*Tout à coup*, 1925)の分析が重要であるが、先行研究ではそれが十分になされておらず、ウイドブロの代表作を彼の詩学の変遷の中に位置づけることができていないという問題意識から、論文の前半で『マニフェスト』と『突然』を取り上げ、それを踏まえて後半で『アルタソール』を論ずるという構成をとっている。

安原氏はまず、クレアシオニスモの詩学を提示したことで知られる詩論『マニフェスト』では、ウイドブロが現実世界とは独立した詩世界の創作を目指していたことを指摘する。詩集『突然』については、詩の主体＝詩人が具体性を欠き、抽象的な存在である点に注目し、現実世界から自立した詩の世界を創造するとき、創造された詩世界は詩人自身からも自立し、離れていくため、詩の主体は抽象化せざるをえないのだと分析する。『マニフェスト』で、詩人は列車に「乗り遅れた機関士」で、列車＝詩を思うように操れないことをうたっていることも指摘する。しかし1920年代以前の詩でウイドブロは、詩人とは全能の「小さな神」であるとみなしていた。それゆえ特権的な力をもつ「小さな神」としての詩人と、詩を自由にコントロールできない抽象化された詩人は相反し、ウイドブロの抱く詩人像には矛盾が生じることとなる。ウイドブロが『マニフェスト』の中で理性の放棄を主張したシュルレアリスムを批判しながら、書かれた詩はシュルレアリスム的であるという矛盾も、同じところに根をもつ。『アルタソール』はこの矛盾を引き受けた上で書かれた作品であると安原氏は指摘する。

『アルタソール』の分析に当てられた後半部では、まずこの長編詩の内容を確認する。詩人がそれまでの詩を自己批判し、埋葬し、新しい言葉を生み出す意志を示し、言葉遊びなどの言語実験を経て、最後の第7歌で言葉が詩人のコントロールを逃れて崩壊し、音の羅列に至ることを概観する。主な先行研究を検討し、言葉と詩の主体＝詩人は同一であるという解釈に異を唱え、詩の言葉は詩の主体を離れて自由になったのだという読みを提示、ウイドブロが自己の矛盾を認識し、自己批判を行った結果であることを明らかにする。

本論文は、20年代に発表された作品が『アルタソール』と地続きであるにもかかわらず、これまでのウイドブロ研究においてはその観点からの考察が欠如しているという問題意識

から出発し、先行研究と作品を適切に引用、参照しつつ導きだした結論は説得力のあるものである。詩の解釈に関して、論を急ぎすぎ、説明不足のところが散見されるものの、全体の構成、論旨に破綻はない。今後安原氏が『アルタソール』以降のウイドブロの創作の軌跡をどのように描き、論ずるのかに期待したい。以上より、審査委員一同は、本論文が第三回優秀論文賞に値するとの結論をえた。